

### ◆◆◆ バングラデシュでの調査を終えて — 前号よりの続編 —

バングラデシュは、イギリスの植民地からパキスタンとして独立（1947年）し、その後1971年にパキスタンと分離独立し現在に至っています。気象観測所は全国に35箇所あり、その半数近くはイギリス植民地時代に設置され、その後に開設された観測所も同じ様式が踏襲されています。これらの内半数近くの観測所では農業気象観測も行われており、蒸発計や地中温度計なども露場内に設置されています。



気象局本局の露場（ダッカ）

観測所に設置されている観測機器は電気式や電子式ではなく、所謂従来型のもので、ガラス管式の水銀温度計（乾球、湿球）、最高気温計・最低気温計、フォルトン式気圧計、3杯風程風速計、矢羽根型風向計、貯水式雨量計や、自記録式のバイメタル式温度計、毛髪湿度計、アネロイド型気圧計、サイフォン式雨量計、ガラス球式日照計など

で構成されています。これら測器の多くは、イギリス製です。気象測器、百葉箱、露場は綺麗に整備されており、勤勉な国民性を垣間見ることができました。また、気象局には測器工場があり、百葉箱、貯水式雨量計、風向計などの製作や、サイフォン式雨量計の試作等が行われていました。



温度計・湿度計



測器工場の様子

観測は3時間毎で、バングラデシュ標準時と世界時の差は+6時間なので、日本と同じように3の倍数の時刻（現地時間）に観測が行われています。観測データは、各観測所で観測原簿に記録されるとともに、国際通報式を用いてダッカの本局に通報されます。通報には、テレプリンターやFAX、電話のほかに、約20箇所からは短波帯の無線電話(SSB)が使用されています。本局では無線オペレーター1人がその受信をしており、定時直前になると通信が輻輳するため、地方観測所では観測時刻を15~20分程度前倒して実施するフライングが行われているのもみられました。

(財団法人気象業務支援センター振興部国際業務課専任主任技師 山本忠治)